

2018.7.23.

論文「関西学院」の命名とその音声 論評

田中健彦

池田信著「「関西学院」の命名とその音声」関西学院史紀要 20 号(2014)について論評を加える。結論から言ってこれは論文として成立しないので、すぐに撤回すべきである。その最大の理由は、中国語の拼音を音声記号であると認識していることである。拼音(正確には漢語拼音)は、中国語のローマ字表記法である(中国文化叢書 1「言語」大修館書店(1997) p.402 参照)。松岡ほか編「超級クラウン中日辞典」三省堂(2008)(以下松岡と呼ぶ)p.1524の中国語音節表の各拼音の横の[]内に音声記号が併記されていることから拼音が音声記号でないことが分かる。その他、間違った記述、不適切な表現や疑問点が多々ある。以下、この論文の各記述について具体的に論評を加えてゆく。まず論文のページ番号を示し、文章を< >で囲って引用する。

(1) p.202 (9)

<後年、吉岡が専門部文学部英文科での講義「国民道徳論」において述べたところでは、総理ランバス¹は彼に「関西は中国語でクワンセイと発音するんだよ」と語っていたそうである(当時の受講者山本善偉・元教員の回想)。総理ランバスが中国(清国)ではすでに公用語とされていた北京語の *guanxi*(ピンイン表記)、*kuansi*²(前掲「大字典」での表記)ではなく、また日本においてはすでに慣用的な発音となっていたカンサイでもなく、随唐時代の主に長安地方の発音であり日本の漢音の原音でもあったクワンセイのほうを選んだことは、これこそが「関西」の古典的な音声であると判断したことによるものであろう。>

1)この中の「関西は中国語でクワンセイと発音するんだよ」というランバスの発言には疑問がある。この発言のあったのは、明治時代であり、中国語とは、その次の行に書かれているように当時の北京語であり、藤堂によれば「関西」の拼音表記は *guanxi* で、音声記号は *kuanši* である。[*kuanši*]は、ローマ字表記ではなく、藤堂らが用いている漢字用の音声記号であり、これを国際音声記号(IPA)で表すと[*kuanci*]となる。[*ei*]は日本語の「シ」とほぼ同じ音なので、<関西は中国語でクワンセイと発音する>というのは、聴き間違いではなからうか?

2)<総理ランバスが中国(清国)ではすでに公用語とされていた北京語の *guanxi*(ピンイン表記)、*kuansi*(前掲「大字典」³での表記)ではなく>も不適切な記述である。拼音が制定されたのは 1958 年なので、ここで当時存在しなかった拼音表記を引用するのは、無意味である。したがって、論文は<総理ランバスが中国(清国)ではすでに公用語とされていた北京語の *kuanši*(前掲「大字典」での音声記号)ではなく>に訂正すべきである。

3)<随唐時代の主に長安地方の発音であり日本の漢音の原音でもあったクワンセイのほ

¹ 米国メソヂスト教会の牧師で、関西学院大学の創設者とのこと。

² *kuansi* は誤植で、正しくは *kuanši*。

³ 藤堂明保編「学研漢和大字典」学習研究社(1998)(以下藤堂と呼ぶ)のこと。

うを選んだ>について、藤堂によれば「関」の漢音は「カン」(現代字音仮名)又は「クワン」(歴史的字音仮名)であり、「西」の漢音は「セイ」であるが、<日本の漢音の原音でもあったクワンセイ>は不適切な記述である。<原音>と書かれているかぎり、論文の著者は<クワンセイ>が音声を表すと考えているようだが、仮名で音声を正確に表すことはできない(仮名 1 文字の音声は、通常「子音+母音」で構成されているからである)。藤堂による字音仮名「クワンセイ」はあくまでも仮名による表記(英語の「綴り」に相当する)であって、発音を表す場合、音声記号[kwansei]を用いなければならない。したがって論文は<随唐時代の主に長安地方の音声の漢音を仮名で表記したクワンセイのほうを選んだ>に訂正すべきである。

(2) p.198 (13)

1)<『学研 新漢和大字典』⁴よれば、「関」の現代音は kuan である。他方現代中国語標準音を示す音声記号ピンイン(拼音)では guan とされる>には重大な間違いがある。すなわち kuan は音声記号であるが、拼音は上述のように中国語のローマ字表記である。英語で言えば、write という表記の音声記号は[rait]である。この論文にはこのような根本的な間違いがあるので、論文全体の信憑性が一挙に失われる。したがって論文は<『学研 新漢和大字典』よれば、「関」の現代音は kuan である。他方現代中国語標準音に基づくピンイン(拼音)表記では guan とされる>とすべきである。この文章の数行下に<両音声記号>と書かれているのも間違いである。

2)<中国語には濁音は存在しないということが前提にされているためであるが、いかに k を無気音化してもピンイン g の音声には到らない。後者からは濁音の響き(声帯の振動)を消し去ることはできないように思われる。われわれが k の無気化ということにこだわって発音しているとそれは中国人には有気の k と取り違えて受け取られてしまう。音韻上ではともかく、音声学的には、やはりピンイン g は無声・有気音 k' の無気化した音ではなく、無気・有声軟口蓋閉鎖音である IPA(国際音声記号)g の無声化した音声と考えなければならない>について、ここでも拼音を誤って音声記号と認識している。次に<中国語には濁音は存在しないということが前提にされている>についてであるが、実際には、中国語にはただ一組の清音・濁音(無声音・有声音)が存在する。それは拼音表記の sh と r である。これらを IPA で表すとそれぞれ[ʃ]と[r]になる。

3)<いかに k を無気音化してもピンイン g の音声には到らない>について、論文の著者は拼音表記の g が有声音を表していると考えているようだが、これの国際音声記号は、[k]であって有声音ではなく無声音であり、また無気音である。拼音表記の k が有気音であり、国際音声記号は[kʰ]である。さきほど述べたように拼音表記の有声音は r のみである。

4)<われわれが k の無気化ということにこだわって発音しているとそれは中国人には有気の k と取り違えて受け取られてしまう>について、筆者(私)は、中国語講座を受講中で、他の受講生とともに中国人教師と中国語で話す機会があるが、我々日本人は子音が無気音

⁴ これは上記「学研漢和大字典」の改訂版。

に聞こえるように、有声音で発音することがよくあり、教師に注意されたことがある。その教師によれば、中国人は有気音と無気音をはっきりと聴き分けることができ、無気音を有声音で発音すると異様に感じるそうである。したがって筆者はこの段落の冒頭の記述に疑問を抱かざるをえない。

5) <やはりピンイン g は無声・有気音 k' の無気化した音ではなく、無気・有聲軟口蓋閉鎖音である IPA (国際音声記号) g の無声化した音とを考えなければならない> について、拼音表記の g は無声・有気音 k' の無気化した音 (すなわち IPA の [k]) であるので、上の記述は間違っている。後半の、<無気・有聲軟口蓋閉鎖音である・・・> はこれで合っている。

(3) p.197 (14)

1) <インターネット上の Wade-Giles Spelling System⁵によれば、「関」のピンイン guan (IPA の g^ouan) に相当するものは kuan (この k は無気音の k) として示されている。前掲の『新漢和大辞典』が使用するアルファベット表記法はこの点ではウェード式を踏襲したものであった> の中の <「関」のピンイン guan (IPA の g^ouan) に相当するものは kuan (この k は無気音の k) として示されている> は、不適切な記述であり、単に <「関」は kuan (この k は無気音の k) と表記されている> とすればよい。ウェード式表記法が提唱された頃はまだ拼音表記法が制定されておらず、またここで問題にしているのは、「関」のウェード式表記であり、拼音を持ち出す必要がないからである。

2) <前掲の『新漢和大辞典』が使用するアルファベット表記法はこの点ではウェード式を踏襲したものであった> は、間違いである。藤堂⁶には見出し漢字の横に、上古音、中古音、元音及び現代音を音声記号で示し、現代音の音声記号の後の括弧内に拼音表記を記載している。「関」について言えば、藤堂の現代音の音声記号は kuan になっているが、これがウェード式表記の kuan にたまたま一致しただけで、「踏襲」ということばは不適切である。ちなみに「関」の音を国際音声記号で表せば [kuan] となる (松岡参照)。

(4) p.196 (15)

1) <一般の英語母語話者にとっては、ピンインの g、IPA の g^o に当たる音はきわめて同定しがたく、かつ発音しにくいものである。彼らは当然にウェードらが提示した無気音 kuan としてではなく、対極にある有気音の kuan と発声することになった> の中の <彼らは当然にウェードらが提示した無気音 kuan としてではなく、対極にある有気音の kuan と発声することになった> は、論文の著者がウェード式表記を音声記号と認識しているのではないかと疑わせる。ウェード式表記は、無気音を k とし、有気音を k' としている。

2) <その結果、1音節 kwán は g^ouan を素とする2音節 kuan よりも経済原理に叶った滑ら

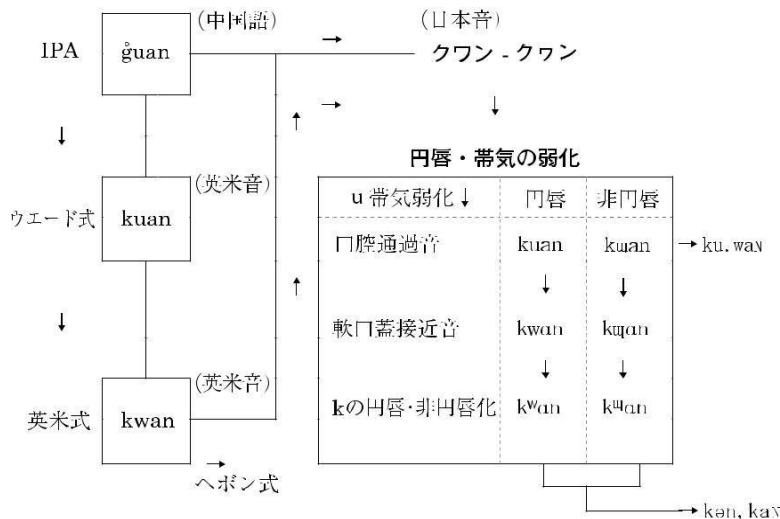
⁵ 通称は「ウェード式表記法」。

⁶ 藤堂の使用している音声記号は、漢字学者専用と思われ、国際音声記号とは異なる点がある。たとえば、国際音声記号の [j][y][ɥ] は、藤堂ではそれぞれ [y][ü または iu][t'] としている。

かな音となる。英語母語話者にとっては **kwan**・[kwan]の方がなじみやすかったといえよう。この中の **kwan** 及び **kuan** は音声記号のことを言っているのであろう。表記(綴り)であれば、**kwan** は **kwan** となるからである。問題は **kuan** を2音節としている点である。もし国際音声記号に従うなら、音節境界を示す記号“・”を使って **ku·an** とすべきである。小西友七ほか編「小学館英和中辞典」(1980)は、綴り字の音節の区切りにこの記号を使っている。拼音表記の場合、'を使う。たとえば酷愛(意味は「熱愛する」)の拼音は2音節の **ku'ai** である。**kuai** であれば「快」などの漢字の拼音表記となる。したがって **kuan** が2音節を表しているとは考えられない。

(5) p.195 (16)

1) 第1図 クワン音の諸相とそれらの関係



注記/ɰ/は非円唇高舌後方母音./ɰ/は軟口蓋接近音(子音)
 なお kʷan のように ɰ を補助記号に使用するのは公認されていないわけではないが、表における kuan の展開から見てこのような発音もありえると考えられるので、表中に位置づけることにした。
 ク、ワ、ン ku, wa, N とカン ka, n, ko, N とは拗音ではありえず、クワンの領域外。

この図の問題点は、左の縦方向に並んでいる **g̚uan** が音声記号であるのに対して、**kuan** がウェード式の、そして **kwan** が英米式の表記法(綴り字)であることである。「関」の発音の変化を明らかにするのであれば、すべて音声記号で書くべきであって、音声記号と綴り字という異質のものを並べても意味がない。綴り字の変化を明らかにするのであれば、音声記号 **g̚uan** を拼音表記の **guan** にすべきであった。したがって、この図はまったく非学術的であって意味をなさない。

この図の右側の表の縦方向の欄に「口腔通過音」「軟口蓋接近音」「kの円唇・非円唇化」とある。初めの2項目は音声の種類であるが、3つ目は音声の変化であり、異質な項目が並んでいることになるので、3つ目の項目名を変える必要がある。

右側の表の **kwan** の **w** は、国際音声記号によれば有声両唇軟口蓋接近音であり、**kuɰan**

の w も有声軟口蓋接近音であるが、なぜ有声の子音が登場するのか理解できない。説明が必要である。

右側の表の第3段の音声記号 $\text{k}^{\text{w}}\text{an}$ と $\text{k}^{\text{u}}\text{an}$ の補助記号については〈公認されているわけではないが、このような発音もありうると考えられる〉と書かれているが、一体どんな発音なのか論文の読者は想像できるのだろうか？もっと具体的な説明が求められる。

(6) p.186 (25)

1) 〈新たに発足させる学校の名を総理ランバスと吉岡が関西学院とし、クワンセイガクインと呼ぼうと協議した 1889 年のころには、字音的カナ表記としてクワンセイは正当な表記であったし、現実の音声において当時カンのほうがクワンより優勢であったとはいえクワンセイと呼ぶもカンセイというも任意であった〉の中の〈字音的カナ表記としてはクワンセイは正当な表記であった〉は間違いである。すなわち当時は歴史的仮名遣いを使用していたので、拗音の 2 文字目を小さく書くことはなく、したがってクワンセイという表記はなく、クワンセイが正しい⁷。

(7) p.185 (26)

1) 〈吉岡は、「ぜひクワンセイ・ガクインと呼んでもらいたい」、「関西学院は、カンサイでなくクワンセイガクインと読んでいただきたい」と語っている。これはまさしく表音的カナ表記であることを示している。というのは、これが字音的カナ表記であるとするれば、「クワンサイでなくクワンセイガクイン」と書かなければならないからである〉の中の〈「ぜひクワンセイ・ガクインと呼んでもらいたい」〉について吉岡がこう語ったということは、どこかにその記録があったはずであり、その記録は明治時代に作成されたはずであるから、上述のように拗音の 2 文字目を小さく書くことはなく、したがってクワンセイという表記はないので、〈「ぜひクワンセイ・ガクインと呼んでもらいたい」〉が正しいと思われる。また〈「関西学院は、カンサイでなくクワンセイガクインと読んでいただきたい」〉についてもクワンセイガクインはクワンセイ・ガクインのはずである。ただ、「サイ」か「セイ」かについては、拗音とは関係なく、呉音ではなく漢音で発音してほしいという意味である。〈字音的カナ表記であるとするれば、「クワンサイでなくクワンセイガクイン」と書かなければならない〉についても「字音的カナ表記」は、「漢字の音読みの仮名表記」という意味なので、「字音的カナ表記」が呉音ではなく漢音でなければならぬというのは間違いである。

(8) p.184 (27)

1) 〈クワンというカナ表記が戦後国語改革では正書法としては認められなくなり、それに伴ってクワンの発音をカンに変更する言語政策が学校やメディアの営みによって学生や視聴者に対していっそう日常的に間断なく執拗に行われ、その結果カンがクワンを圧倒してしま

⁷ 病院及び美容院の歴史的仮名遣いは、両方とも「ビョウイン」であり、区別が付かなかった。

っているという状況下では、現代的カナ表記としてだけでなく、現代的呼称としてもカンセイガクイン、*kən. sei. gāk. in* とすることもやむをえないことであつたのかもしれない>の中の<クワンというカナ表記>は、すでに述べたように間違いであり、<クワンというカナ表記>が正しい。<…戦後国語改革では正書法としては認められなくなり、それに伴ってクワンの発音をカンに変更する言語政策が学校やメディアの営みによって学生や視聴者に対していっそう日常的に間断なく執拗に行われ>について、太平洋戦争終結まで使われていた歴史的仮名遣いは戦後廃止され、1946年に昭和21年内閣告示第33号「現代かなづかい」が公布された。その後これは1986年に改定され、昭和61年内閣告示「現代仮名遣い」となった。論文では、仮名遣いの変更が強制的に行われ、被害を被ったように表現されているが、これは仮名遣いを基本的に実際の発音に近付けようという意図の下に法令が制定されただけのことである。論文の著者は、「ことばの発音は、法令に従って行われるものではなく、実際に行われている発音に従って法令が制定される」ことを理解していないのだろうか？現代の学生がこれを読めば、間違つた経緯が頭に刻み込まれることが懸念される。<現代的呼称としてもカンセイガクイン、*kən. sei. gāk. in* とすることもやむをえないことであつたのかもしれない>について、明治時代から昭和にかけて[kwan]の発音は[kan]に変化してゆき、昭和の戦前期には[kwan]と発音する人がいなくなったので、戦後法令の制定により「クワン」の仮名遣いを実態に合わせて「カン」としたものであり、すべての日本人が「関」を「カン」と発音しているのであるから、<やむをえない>という表現は不適切である。

以上